

# 文化的できごととしてのソ連邦解体 —スーザン・バック＝モース『夢の世界とカタストロフィ』を読む—

石丸 敦子

## 目次

はじめに

1. バック＝モースの方法
2. 四部構成の叙述
3. 何が問題か
4. 「ペレストロイカ」—残された課題

## はじめに

たしかにソ連邦崩壊は、二つの感覚をもたらした。ひとつは、共産党独裁の下にあったソ連・東欧の人びとが、これによって抑圧と欠乏の状況から解放されるかもしれないという期待であった。もうひとつは、資本主義を克服する試みであったはずの社会主義がついに潰え去ったという幻滅である。

実際、ソ連邦崩壊後に、ロシアの人々は一転して新自由主義の容赦ない外圧にさらされることになる。先行きの見えないままに、ともかくも体制転換を引き起こした奔流に押し流されていくばかりで、一瞬間に垣間見えた自由と繁栄の夢は、短時日のうちにむなしく遠ざかってしまった。また、超大国の国民であるという誇りが打ち砕かれる経験が続いていた。経済政策の初動の不手際が生んだ効果も累積して、人びとの生活は急速に逼迫し、早くも 90 年代には、実生活の面で深刻に打ちのめされることになった。

社会主義というユートピア構想にわずかなりとも可能性を見いだしていた人びとは、なぜこの事業が無残な結果で終わるしかなかったのか、という問いを立てざるを得ない。社会主義の理念は、資本制的生産による搾取を止揚し、すべての人類が平等に生きる機会を生み出し、弱者が網の目からこぼれることのない究極のユートピア世界の実現をめざすものだったはずである。目の当たりにする帰結は、マルクス主義と社会主義イデオロギーの失敗と敗北でしかないのだろうか。たしかに、冷戦の構図が消失したあとの新しい支配の構図は、グローバリズムと新自由主義によって描かれている。そこでは貧富の差が再び拡大し、地域紛争、

民族紛争が噴出し、世界は改めて混迷を深めつつある。しかし、この混沌は、もはや資本主義対社会主義、民主主義対全体主義といった二項対立ではとらえられない。では、それに代わる概念はどのように構築させるべきだろうか。

スーザン・バック＝モースの『夢の世界とカタストロフィ—東西における大衆ユートピアの消滅』(堀江則雄訳、岩波書店、2008 年) ; Buck-Morss, Susan, *Dreamworld And Catastrophe: The Passing of Mass Utopia in East and West* (The MIT Press, Cambridge/Massachusetts/London, England, 2000) 大著は、人口に膾炙している了解とは違って、実在した社会主義が資本主義に根源をもつという命題を提示している。大衆ユートピアの建設という 20 世紀の夢は、資本主義と社会主義の両方にとって、産業的近代化を中心に据えたイデオロギーであったという点で共通している。その基底には、産業的近代化は大衆に物質的幸福を提供することによってより良い社会をもたらすことができるという大衆民主主義の神話があった。いまやこの神話は、重大な挑戦を受けている<sup>1</sup>。この点を解明するために、バック＝モースは、本書を通じて、社会主義と資本主義が抱いた夢の世界の形態を比較したのであった。

## 1. バック＝モースの方法

著者バック＝モースは、1990 年からコーネル大学行政学部教授として政治哲学や社会理論を教え、映像学の主任でもある。ドイツ批判哲学、フランクフルト学派の理論を学び、イエール大学で修士号、ジョージタウン大学で博士号を取得した。専門は批判理論(フェミニズム、フランクフルト学派、マルクス主義、ポスト・コロニアリズム、ポスト・モダニズム、精神分析)、文学および視覚文化理論としている。ヴァルター・ベンヤミン、テオドール・アドルノの著名な研究者としても知ら

<sup>1</sup> スーザン・バック＝モース、堀江則雄訳『夢の世界とカタストロフィ—東西における大衆ユートピアの消滅』(岩波書店、2008 年)、v-vi 頁。

れるし、近年は、主権理論や正当性と信仰の問題、政治ヴィジョンのエコノミーなどに取り組んでいる。

彼女は本書では大衆ユートピアの両極端、つまり夢の世界とその破局(カタストロフィ)を扱っている。東西冷戦に西側が勝利したという物語が支配的だが、ソ連社会主義体制の構築は西側資本主義の近代化の伝統に深く根ざしており、したがってその体制の崩壊は、西側の進歩を工業化と捉える物語全体の立脚点を脅かすものだった。そのことを考察する際のバック＝モースの方法意識に留意したい。それは、彼女が強く影響を受けているヴァルター・ベンヤミンの『パッセージ論』に見られるような、その時代の人々の夢の痕跡を救い上げ、モザイクのように布置して、新たな光を投影しようとするそれである。彼女もまた、人々の記憶を丹念に拾い集めて再構築し、レーニン、スターリンのソ連前期を牽引していたと思われる夢とユートピアの感覚の実相を浮かび上がらせている。

ベンヤミンの「救済の理念」による歴史把握の方法意識<sup>2</sup>とはどのようなものか。通俗的で表層的な歴史はつねに勝利者によって作られてきたが、ベンヤミンは、歴史を破局（カタストロフィ）の連鎖とみなした。歴史は、同時代的には消極的、実りなきものとしてうち打ち捨てられてきたもの（死んでしまった人、事件、経験など）がうず高く堆積した廃墟である。しかし、瓦礫の山の中に実現しなかった可能性が隠れている。この瓦礫の山の中から、積極的なものを救い出すことが彼の歴史的思考である。この作業を際限なく繰り返すことによって新しい何かが産出される。この概念的に把握されたポジティブなものは、ネガティブなものを背景にして「輝く星々」と表現される。星の集まりは、概念すなわちアイデアであり、「星座」にたとえられているのである。「星座」を組み立てる操作は過去の「ありえたかもしれない可能な生」を浮かび上がらせる。この「星座」は、理念的には現代によみがえり救済され、現在を變形する力

を獲得する可能性を持つものであり、それを取り出す思考がベンヤミンの歴史哲学テーゼであった。

現在にはある特定の過去が対応していて、そこにその時代の「星」のかけらが交じっているはずである。その特定の過去こそが現在の根源ともいえるべき時代である。歴史は、実証主義的に諸事件を時系列で捉えるよりも、明らかにしたい時代の対応する過去の概念を救出する方がより鮮明に真理を開示するのである。そのような過去は、危機の時に一瞬きらめくものという独特の理解によるイメージである。危機の時とは歴史の連続が断裂した時であって、「虎の跳躍」ともたとえられる。「虎の跳躍」を実現することは、その機をとらえようと地味な「星座」の構成作業を不断に行う歴史記述者の営為にかかっていることを忘れてはならない。この特異な瞬間をとらえるひとこそ、歴史哲学者としての認識者であり、ベンヤミンであり、バック＝モースであったのだ。

## 2. 四部構成の方法

本書は、四部構成になっている。

まず、第一部を通じて、資本主義と社会主義は通念に反し同根であり酷似しているものであり、そのため社会主義の崩壊は資本主義の立脚点をも危うくするという、全編を通しての基本となる概念が獲得されている。理解の前提として、本来的にはソ連邦も民主主義の国家を目指していたということは確認しておかなければならない。結果的にはブルジョワ民主主義以上にはなはだしい形骸化を引き起こしたとしても、あくまでソ連邦内部では、自分たちが西側よりも高度な民主主義を持つと自認されていた<sup>3</sup>。しかし、その民主主義に本質的に内在する矛盾があったことを示すことが第一部の核心である。バック＝モースは、ホブズ、マルクス、トロツキー、マックス・ウェーバー、カール・シュミットらの言説を分析して、大衆民主主義の政治制度の中で、国家こそが市民と市民社会を守るべし、という契約を交わしたとたんに、市民は不可避免的に主権とそれに付随する戦争という領域を国家に委ねてしまわざるをえないことを論証している。同時代史的に冷戦やロシア革命を

<sup>2</sup> ベンヤミンの未完の著作『歴史の概念について(通常『歴史哲学テーゼ』と呼ばれる)』のその概念が述べられており、『パッセージ論』で実践されている。ここでは、今村仁司、『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』(岩波書店、2000年)の解説を参照した。

<sup>3</sup> 塩川伸明『20世紀史を考える』(勁草書房、2004年)、121頁。

検証するのにとどまらず、マルクス主義もブルジョアジーもともに自分たちの根源としたフランス革命にまで議論を遡及させ、革命的テロリズムと民主主義という二つの矛盾した核心を両者が共に継承していたことを強調している。民主主義の政治形態であると標榜する点で、資本主義体制と社会主義体制は、正反対のものであるどころか、根源を同じくする。そして、巨大なテロリズムの領域を操る権力を本来的に内包していたという点でも、きわめて同質である。

それに対して第二部は、ボリシェヴィキの文化革命を論じている。暴力的にブルジョワ独裁を転覆した後、レーニンは革命的な記念碑を国中に立てることによって、革命を日常生活の無意識の現象として定着させようとした。革命によって史上初めて成立した大衆という新しい集団に対して、党は主権の正当性を提示する必要があったからである。十月革命が世界革命にいたる崇高な事例として認識されなければ、ロシア革命はペトログラードでのたんなる都市クーデターにすぎず、冬宮襲撃はただの蛮行で、臨時政府の転覆は反逆でしかなかった。レーニンの死後は、レーニン自身の記念碑像とモスクワのレーニン廟は、革命を堅固にする錨となり、党は不滅、普遍、正統なものになった。記念碑によるプロパガンダと並行して、ボリシェヴィキは、旧体制を否定し 20 世紀の新たな価値を作り出そうとするロシア・アバンギャルドの大きなうねりを巧妙に政治に取り込んだ。それは、後進国の革命ロシアが先進諸国に迫いつき追い越す時間との戦いに大衆を駆り立てるためであった。飢饉と内戦の目を覆わんばかりの惨状がそれに続いたために、芸術家たちに困難な現在の先にある到達可能なユートピアを描き出させるという喫緊の必要があったのである。ソ連草創期には、アバンギャルドの芸術家は、自らを社会主義社会建設にかかわる大衆の前衛と位置づけ、大衆の間には未来への期待と展望が抱かれていた。レーニンは、集団的想像力の持つエネルギーを理解していたために、ユートピアを描き出して見せ、芸術を「時間との戦い」に大衆を動員するための挑発の手段として利用したのである。この時代の芸術の志向は宇宙規模のスケールを持ち、その機動性を最大の特徴としていた。しかし、その後の

スターリン時代には、擬制の社会主義ユートピアを描き出して見せなければならぬほど、現実には人々の夢の世界から乖離する。スターリンの粛清は、人びとが夢の世界を実現するわずかな可能性もないことを認識させたからである。下って、フルシチョフの「雪解け」の頃には、社会主義の優越性に対する楽観的な信頼が生まれかけたが、それもまたハンガリー革命の圧殺やプラハの春の封じ込めで、ついでにしまった。その後の停滞のブレジネフ期には、もはや誰も幻想に身を任せたりはしなかった。要するに、ソ連邦の歴史で、ユートピアの感覚が可能となったのは、ごく初期の時だけであり、その感覚もすぐにちりちりになってしまうのである。

第三部が扱うのは、戦争と破壊的な政策に彩られていたソ連前期の物語である。レーニンは、搾取という悪弊を除いた形で資本主義的な形態を導入することができる、と考えていた。有名な「社会主義とは、ソヴィエトプラス電化である」というテーゼはここに成立する。そして、社会主義の建設の成否は、テラー主義<sup>4</sup>のような資本主義の最新の達成物を導入できるかどうかにかかっている。そのために、資本主義的生産様式とは分かつことのできない精神的なダメージと搾取を包含したまま、工場システムは導入されたのである。しかし、ソヴィエトという違う土壌に移し替えても、資本主義制度の中の搾取の構造が消滅することはなく、人間は疎外される。スターリン時代の社会主義リアリズムでは、絵画では陽光あふれる幸福な日常生活を描き出したが、それは現在の「ありのまま」の現実ではなく、「描写されたものは既に存在する現実である」という命題を受容させられる現実空間を創出すること<sup>5</sup>であった。大粛清では、スターリンの個人の権威の高揚と権力の伸長が最優先課題とされた。1937 年に、モスクワのゴーリキー文化レジャー公園でスターリン主義最盛期の夏季のイベントだったカーニバル祭りが行われていた。同じ夏、スターリンは赤軍高級司令官トハチェフスキーの裁判を開始し、その後数カ月で何万人にも上る人材が粛清の犠牲になった。スター

<sup>4</sup> 工場で労働者の能率を増進させるため一切の無駄を排除し、その管理を科学的に行う方法。

<sup>5</sup> 塩川伸明他編『ユーラシア世界④公共圏と親密圏』（東京大学出版会、2012 年）、45 頁。

リン主義文化の二枚刃の想像力、すなわち大衆に約束された幸福の夢の世界と、そこから追放される人々を待っている悪夢は、大衆を統制する効率的な道具になったのである。スターリンの五カ年計画がいかに西側資本主義に根ざしていたかを示す顕著な事例がバック＝モースによって掘り起こされている。1928年の第一次五カ年計画では、自動車産業や巨大鉄鋼コンビナートなどの重工業関連の施設は、ほとんどフォードを始めとする米国の大企業による設計で、建設後の監督も米国の技師チームが行った。この時、テクノロジーばかりでなく熟練者の大量移転も行われたのである。米国の企業は、1930年代初頭の経済恐慌のなかで、ソヴィエトとのこのビジネスを密かに歓迎していた。スターリンの五カ年計画とは、資本主義の歴史における最大のテクノロジー移転のひとつにすぎなかった。これには興味深い後日談が加わる。テクノロジーの移転に対する支払いは、ハードカレンシーを必要としたが、ソヴィエトの最大の外貨獲得手段である穀物輸出は、強制的な農業集団化が引き起こした厳しい飢饉によって1930年代前半急激に低下していた。代わりにソヴィエト政府は、十月革命で没収した貴族階級のヨーロッパ絵画や「家財道具」に目をつけ、外貨を得るためにロシア所蔵の美術品を海外に売却したのである。その購入の資金は、アメリカの実業家とソヴィエト高官のネットワークを通じて洗浄された。米国財務長官アンドリュー・メロンは、1930年から31年の間にソヴィエト政府からエルミタージュ美術館の美術品を購入したが、その額はソ連邦が同じ年に輸入に支払った外貨の半分に達していた。その中には一点で絵画として当時の最高額をつけたラファエロの『アルバ・マドンナ』も入っていた。ところが、こうした事情でソ連から消えてしまった絵画は、通常は1931年のエルミタージュの火事によって、あるいはのちのドイツによる破壊のせいで失われたとされている。

新しいプロレタリア文化の中では、自分の生まれた工場が労働者の社会的なアイデンティティだった。ソヴィエトの工場は、雇用を目的とした生産を進める。産業の効率性ではなく、社会保障が労働の原則となったのである。健康、教育、福祉は社会主義の理念上はもちろん市民の権利であり、

無償で提供された。しかし、この権利を得るためには労働だけでなく、指導者へのゆるぎない忠誠心や一点の曇りもない愛情と献身を示す必要があった。スターリンは彼ら全員の父親であり、善意によってあらゆる贈り物を授ける者でもあった。このイデオロギー的なシナリオは、スターリン時代に執拗に繰り返され、その中でソヴィエト市民は小児化されていった。それは、社会保障という約束された夢のために支払われねばならない高い代償だった。工業的近代の形態は、資本主義の下では即時の満足感という消費幻想の形をとり、長期的な需要には注意が払われず、社会保証も不確かなものであるから、失業が自然の大惨事のごとく突然襲いかかってくる。それに対して、ソヴィエト型社会主義の下では、即時の満足が存在しない一方で、国家が全面的な安全を提供している（つまり全面的な依存を求める）というのである。

第三部では、20世紀前半のソ連の歴史を形作る歴史的事実や人々の思索の痕跡を救いだし、あらためて批判的にそれらを布置し直して、概念を構成することが試みられている。第二部とは別の角度から、ソヴィエトのモダニズムが西洋のモダニズムと深く結びついていたことが提示されている。ソ連では失業のない福祉制度の充実した世界という大衆ユートピアが一面実現されているかに見えたが、それは個人の自由な精神とアイデンティティを差し出してはじめて獲得されたものであった。少しばかりの自由がある代わりに、失業があり、福祉制度も不十分な資本主義社会は、同じコインの裏表である。どちらにも大衆ユートピアは実現されていない。ソ連のその後を規定したと思われるスターリン時代がここでの主な考案の対象である。このころまでには、一国一工場的な経済政策がすでに国家と官僚制を肥大させており、世界革命の理念を放棄し、一国社会主義を提唱せざるを得ない状況になっていた。ソ連は、実質はスターリンを頂点とする共産党の専制政治であり、粛清を頂点とする恐怖政治をしいた全体主義の国家であった。産業化政策と農業集団化は、大量の犠牲者を出しながらも、それでもソ連を超大国に押し上げたのではないかという、結果によって正当化する議論もある。このような歴史観に対し、バック＝モースは、自らの手で「かけら」を選別して救

い上げ、概念を構成しなおす作業を試みたのだった。そこでは、スターリン主義のソ連邦がイメージとして再検証される。この国家には、西側資本主義的進歩主義が充溢しており、大衆の夢の世界としての社会主義体制などは存在しなかったのである。

さて、第四部は、バック＝モース自身のモスクワでの見聞に基づく叙述である。彼女は、ソ連の哲学者たちとの共同研究のために、まさにペレストロイカ期と解体期前後にモスクワに滞在し、リアルタイムでソ連解体を目撃することになった。

ペレストロイカが成果をあげられず、ソ連におけるゴルバチョフの威信が急落した後、エリツィンのソヴィエトの正当性を決定的に破壊する言動は、各共和国に独立宣言の波を引き起こした。犠牲の少ない、なだらかな漸進的変化を追求するゴルバチョフの路線は生ぬるく感じられ、革命的な破壊を唱えるエリツィン流の路線が大衆的支持を集めたのである。民営化から利益を得たのは、ソヴィエト・エリートのノーメンクラトゥーラ<sup>6</sup>であり、かれらは軍産複合体でのインサイダーの地位を利して、政治権力を経済権力に移し替えた。また、ロシアの経済的独立を台無しにして、この国をグローバルな体制に縛り付けて後戻りできないようにしたが、それでも国内生産の復興には成功しなかった。市場経済の歴史がなく、移行には外からの介入に頼らざるをえなかった。導入されたショック療法のために、結果として社会は修復不可能なほどのダメージを受けた。一握りの極端な富裕層と、ソ連時代にはあり得なかった貧困層の拡大と失業がもたらされたのである。米ソ両国は、軍事優先の体質と硬直性、そして内部の異論への不寛容という点でも、奇妙に類似していた。ただ、軍拡競争がソ連にとってより耐え難い重荷となったために、最終段階で決定的な差異をもたらしたにすぎないと総括されている。ペレストロイカと移行期を論じる第四部も、ベンヤミン的方法意識に忠実にのっとなって構成されている。短いが大量の事件が続く時期であるにもかかわらず、バック＝モースの叙述はけっして把握しやすいように順を追って語るといふ具合にはなっていない。か

けら」は時系列ではなく共通するイメージの塊として提示されている。しかし、そのためにこそ、かえってペレストロイカ期と移行期の緊張した同時代状況の中にいるような錯覚を覚えるほどである。ソ連邦崩壊は、徹底的なパラダイムチェンジだと一般的には理解されている。だが、惨事便乗型資本主義<sup>7</sup>と名づけられた、アメリカのネオ・リベラリズムの現象の一事例にすぎなかったかもしれない。バック＝モースはこのペレストロイカ期とその後の移行期を、現代ロシアを解明する上での鍵の時期として捉えているようである。動く標的をとらえようと奮闘するそばから、ペレストロイカの夢は瓦礫の山にうずもれていくのだが、それにもかかわらず「夢のかけら」を拾い集める作業はいつそう速度を上げて進められている。

### 3. 何が問題か

バック＝モースは「夢の世界」という概念をベンヤミンから借用していると述べた。モダニティを世界の再魔術化ととらえたベンヤミンは、この用語を「近代生活に固有のはかなさと文化伝統を危険にさらして絶えず変化する諸条件を、積極的な意味で承認するもの」<sup>8</sup>として用いている。それは、「恒常的な変化は、未来はもっと良くなるという希望を与える」<sup>9</sup>からだとして解釈している。しかし、冷戦崩壊は、それ以前も以後も、「夢の世界の巨大なエネルギーが権力の機構によって道具として使用され、そこから恩恵を受けると思われていた大衆に対する力の道具として動員」<sup>10</sup>され続けていることを明らかにしてしまった。バック＝モースは、ソ連邦の崩壊に直面し、モダニティが大衆の夢の世界を消滅させたと説く。近代化のダイナミズムはヨーロッパ中心主義であり進歩主義である。それが冷戦に勝利したとする判断は、もちろんバック＝モースだけのものではない。バック＝モースは、爛熟した資本主義を超克した発展段階に世界で初めて到達したはずの社会主義社会が、黎明期からその構造にモダニズムという枠組みを組み込んでおり、それどころかそのモダニティを可能

<sup>6</sup> 党の人事による、指導的役割を果たす幹部や特権階級を指す。

<sup>7</sup> ナオミ・クライン、幾島幸子・村上由見子訳『ショック・ドクトリン』（岩波書店、2011年）。

<sup>8</sup> バック＝モース『夢の世界とカタストロフィ』、vii 頁。

<sup>9</sup> 同上、vii 頁。

<sup>10</sup> 同上、vii 頁。

なかぎり追求してきたということを、文化論的に考察した。ソ連邦の社会主義体制は西欧の近代化の伝統に深く根ざしており、そこでは工業化的近代化こそが進歩と解釈される。バック＝モースは、ソ連邦の崩壊は、同じ構造を持つ異なるバリエーションにすぎないものの片割れの破局であり、それは本家の西側資本主義体制自体が崩壊の危機に瀕していることを意味すると論じたのだ。

彼女にとって、ソ連崩壊後、「近代の社会悪は市場への政治的介入によって引き起こされるとする歪曲や、社会主義だけでなく最近では福祉国家さえ市場の規範からの不健全な逸脱として一括してファシズムとみなすべきだというネオ・リベラルの主張」は承服できるものではなく、断固拒否されなければならない<sup>11</sup>。著者の問題意識を突き動かしているのは、資本主義体制の現状に対する強烈な危機感である。

バック＝モースは、「資本主義は望ましい、避けられない、普通の自然な社会生活の調整である<sup>12</sup>」という価値観を解体しようとする。むしろ、社会主義思想こそが、人類全般の普遍的なユートピア性を救出する可能性を擁している。ベンヤミンの言う「救出・解放されるべきありえたかもしれない過去の可能性」を、バック＝モースは社会主義という夢を救出することととらえたのである。それによれば、ソ連の失敗は、社会主義の実現の失敗であって、社会主義の夢自体の失敗ではなかったのである。

しかし、歴史の断絶の時に少しでも開かれた可能性への入り口は閉じられてしまった。現実世界を動かしているのは、崩壊後に隅々に拡大した資本主義の権力構造であり、その構造の基礎をなすのは西欧中心主義である。だから、モダニティを超える営為とは、知識人が行ってきたその批判的な文化的実践も含めた思想全体を見直すことでなくてはならない。

バック＝モースは、近代の夢を「社会的なユートピア、歴史の進歩、そしてすべての人にとっての物質的な豊かさ」<sup>13</sup>と呼んでいる。現存した社会主義は、この夢の実現を資本主義のテクノロジー

ーを用いて人間も含む自然を支配することと設定してしまった。そして、その過ちによって、大衆ユートピアの世界を消滅させた。広義のマルクス主義者である著者は、『経済哲学草稿』の次の一節を引いて、近代の夢を救出する際に自然との新たな関係を取り結ぶことが必要であると説く。

社会的な人間にとって初めて、その自然な生活が人間的な生活となり、自然が人間化される。だとすれば、社会とは、人間と自然とをその本質において統一するものであり、自然の真の復活であり、人間の自然主義の達成であり、自然の人間主義の達成である<sup>14</sup>。

資本主義に根ざした「現存した社会主義」の中では、人間は疎外されたままであった。社会主義思想の中に本来こめられていた普遍的な人類の夢は、マルクスの唱える自然と人間が根源的にゆたかに結びつくなかにおいてのみ救出可能なのだと、バック＝モースは論じている。

#### 4. 「ペレストロイカ」―残された課題

くりかえしになるが、本書のいちばん興味ぶかい本書でのバック＝モースの分析対象は、ソ連前期が中心である。しかし、著者の提言する思想全体の見直しをはかるためには、現存した社会主義全般の具体的な分析も欠かせないであろう。スターリン後の徐々に体質を変えていく社会主義の中に埋蔵されたままで、本書では充分掘り起こされなかった大衆の夢のかけらの鉱脈を一通り探訪してみる<sup>15</sup>。

スターリン批判に始まり、部分的な自由化をもたらしたフルシチョフの「雪解け」政策の中にあつた 60 年代ソ連の特徴は、「大祖国戦争」として戦われた第二次世界大戦が二千数百万人の犠牲者を出しつつも勝利したことと、スプートニク打ち上げの成功をシンボルとする工業化と経済復興の進展を、国民的原体験として持っていた。そのた

<sup>14</sup> カール・マルクス、長谷川宏訳『経済学・哲学草稿』（光文社、2010 年）、148-149 頁。

<sup>15</sup> 歴史叙述は、木村汎、袴田茂樹、山内聡彦『現代ロシアを見る眼「プーチンの十年」の衝撃』（NHK ブックス、2010 年）に依拠した。

<sup>11</sup> 同上、x 頁。

<sup>12</sup> 同上、x 頁。

<sup>13</sup> バック＝モース『夢の世界とカタストロフィ』87 頁。

め、社会主義の優位に対する底抜けの楽観主義が国民の間に浸透していた。それは、東と西の経済とテクノロジーのポテンシャルの差異が可視化されずに、フルシチョフの迷走する政策にも関わらず権力の描き出す大衆ユートピアの幻影が十分に威力を放っていた時代でもあった。

「雪解け」の自由化は、同時に反体制知識人の存在を明るみにだし、パステルナーク、ソルジェニーツィン、サハロフ博士らがその精神的指導者とみなされ、その活動は世界の注目を浴びるところとなった。しかし、一般民衆はむしろ肯定すべき社会を揺るがすものとして、共産党と共に彼らを弾圧する側に回ったのである。これらの反体制知識人たちは、ブレジネフの70年代には潜伏し、改革派として政治の表舞台に再び登場するのは80年代ペレストロイカの時代である。ソ連経済の停滞の深刻さの認識と、彼ら知識人の改革運動が相まってペレストロイカを推進し、1991年のソ連邦の崩壊につながった。

1970年代は、ネオ・スターリン主義とも言われるほど精神的に閉塞感の強い時代となった。共産主義は、70年代にはとびきり保守的な思考様式に転じていた。経済的には、「停滞の時代」と呼ばれ、社会主義経済の非効率も露わになった。一般のソ連国民も、先進資本主義国がソ連よりも豊かだということを知るようになり、工業化や都市化を無条件に賛美する従来の共産党イデオロギーや社会主義建設の理念に疑問を持つようになった。

ただし、「なくなるまでは永遠だった<sup>16</sup>」という言葉を生み出すほど、ソ連後期は不思議な安定の中にあったのである。そして、そうした背景があったために、体制転換後にただちに逼塞してしまった90年代以降、はからずもこのブレジネフ期をなつかしむノスタルジー現象が見られた。たしかに、人々は公的な監視におびえ自由を抑圧されていた。しかし、医療費、教育費、年金等のセーフティネットは完全に無料であり、失業の心配はなく、上昇志向を持つものにはそれに応えて機会を与えるルートさえ用意されていた。そのような時代を人々はなつかしむのである。ユルチャークが指摘するように、崩壊の直前まで、誰もソ連邦が

なくなることを想像しなかった<sup>17</sup>。まさに1991年のあの時に、解体を必然的な流れだとする感覚が、ソ連邦の人びとに一般的に分かち持たれていたわけではなかったことは重要である。それでも、安定を称揚する国家の公的言説にも人々は真実を見いだしてはいなかったため、いざ崩壊が始まってからは、新体制への移行はほとんど躊躇なく受け入れられた。

80年代に海外渡航が許されるようになって人々が知ったのは、あれほど憧れた西欧の文明がすでにソ連邦の生活に浸透しているという皮肉な現実だった。ソ連の内実は、西側の生活の水準から激しく乖離していたわけではなかったのである。上からの改革であったゴルバチョフのペレストロイカが波紋を投げかけるまでは、人々の忍耐は限界を迎えていたわけでもなく、システムはそれなりに機能し存続していた。ソ連邦では、指導部がイデオロギーの正当性を立証しようとしたため、女性の権利を擁護する先進的な家族法が世界に先駆けて実現されていた<sup>18</sup>。ソ連では失業が存在せず、ほとんどの人が一定レベル以上の生活を送るのが可能だったときに、アメリカでは繁栄の謳歌のかげで、巨大な貧困層が広がっていた。

こうして概観しただけでも、ソ連期が単に社会主義という実験の失敗であり、歴史を断絶させた空白の期間であったという評価が妥当性を欠くことは明らかである。

ペレストロイカ期とそれに続く移行期は、そのドラスティックな外観とは異なり、見る間に「グローバル資本主義体制へ併合<sup>19</sup>」されていく過程であった。今日のロシア連邦のあり方はこの時期にほぼ規定された。バック＝モースは、批判的な政治エネルギーの大波がうねったのは、壁の崩壊以前の時期だと分析しているが、慧眼である。「批判的思考の解体はその後すぐに始まり、その結果、創造的な思想がまったく出現しなかった<sup>20</sup>」という思いがけない事実も述べられている。この状況を塩川は、「旧体制時代にインテリを支えていた

<sup>16</sup> Yurchak, Alexei, *Everything Was Forever, Until It Was No More*, 1.

<sup>17</sup> Alexei Yurchak, *Everything Was Forever, Until It Was No More. The Last Soviet Generation* (PRINCETON, 2005), 1-4.

<sup>18</sup> 塩川伸明他編『ユーラシア世界④』、157-184頁。

<sup>19</sup> バック＝モース『夢の世界とカタストロフィ』、284頁。

<sup>20</sup> 同上、284頁。

「政治的抑圧に抗して精神の自由を守る」というヒロイックな反骨精神が衰弱し、拝金主義が跋扈する状況」<sup>21</sup>と表現した。管見によれば、ペレストロイカは解明されていない部分が多い特殊な時期である。現代ロシアの本質を解明するために、この時間をバック＝モースの方法意識を使ってさらに分析することが次の重要な課題ではないだろうか。

本書の主要部分は、レーニン＝スターリン期の近代化を進めるために大衆の夢の力の動員を画策した権力側のディスクール分析である。だが、その権力者たちを選び取って夢の実現を託し、圧政を許容してしまったのは民衆である。バック＝モースの作業とともに、権力者側が打ち捨ててしまった民衆の言説を対象にし、個々人の夢を救い上げ、それを集合的記憶として再構築することもまた、あらためての課題となるであろう。

(いしまる あつこ・東京外国語大学大学院博士前期課程)

---

<sup>21</sup> 塩川伸明『現存した社会主義 リヴァイアサンの素顔』、564頁。